

うぬぼれ屋か 天才か

19世紀の大建築家【前編】

ジョン・ナッシュ

ロンドンにある目抜き通りのなかでも、独特の華麗な曲線美でひととき目立つリージェント・ストリート。リージェンツ・パークを北に頂き、南は、バッキンガム宮殿へと西に向かって走るザ・マルにぶつかると同時に、トラファルガー広場を経由してチャリング・クロスへと至る道につながる。壮大な構想の中心として造られた通りだ。このプロジェクトを実現させたのは、浪費癖で知られたジョージ4世と、その寵愛を受けた建築家ジョン・ナッシュというふたりの人物。今回は、このジョン・ナッシュに焦点をあててみることにしたい。

空から望むリージェンツ・パークとリージェント・ストリート ©The Crown Estate
この傑作を生みだしたジョン・ナッシュの像はリージェント・ストリートの北端、オール・ソウルズ教会に設えられている。

英国王室の「長寿」のヒミツ

ノルマンディー公ウィリアムが、「征服王」ことウィリアム1世として即位して以来、千年近く続く現英国王室は欧州内で屈指の「長寿ぶり」を誇る。同王室の歴史のうち、約800年は国王と議会（当初は諸侯たちの集まり）の『綱引き』の歴史といっていだらう。諸侯とはこの場合、国王から土地、すなわち財産を与えられた地主貴族を指す。贅沢をしよう、あるいは他国と戦争をしようともくろむ国王に対抗し、それを抑えることに全力を尽くすのが諸侯たち、というのが一般的な図式だった。

諸侯が一致団結したことが議会政治の始まりと考えられ、英国では1215年、諸侯たちが国王を相手に、「マグナカルタ（大憲章）」に署名させたことが大きなはずみとなった。やがて議会発足へと発展し、1258年には、英国史上で初めて「パラメント（Parliament＝議会）」という言葉が用いられたという。

土地を与える立場にある国王（統治者）を相手に、土地を与えられた諸侯（被治者）が、自分たちの身と財産を守るため、国王に「法に従うよう」を要求し、「失地王」ジョン（※）にそれを認めさせた「マグナカルタ」の成立は、王室サイドから見るときわめて屈辱的なことだったが、長い目で眺めてみると幸いなことだったといえるのではなからうか。このおかげで英国王室は今日まで生き残ることができたといっても過言ではないからだ。

暴走を抑制された歴代英国王は、フランス革命を招いたブルボン王朝のように湯水のごとく国庫を浪費することを許されなかったがゆえに、根絶やしにされるほど憎まれることもなかったというわけだ。

※ジョン王：無能と称されることの多い同王（在位1199―1216年）は、北西部フランスにあったイングランド王室領を全て失ったことから、「失地王」ジョン（John the Lackland）と呼ばれる。



ジョージ4世。この肖像画ではうまく隠してあるが、美食家としても知られた同王は、超肥満体だったという。(Reproduced by courtesy of the National Portrait Gallery)

位期間はわずか10年。摂政皇太子
1762年8月12日に生まれ、
1830年6月26日に67歳で亡
くなったジョージ4世の正式な在
位期間はわずか10年。摂政皇太子

時代を入れても20
年ほどだが、この間に
リージェント・スト
リートとリージェン
ツ・パーク、カール
トン・ハウス・テラ
ス、シアター・ロイ
ヤル・ヘイマーズケッ
ト、オール・ソウル
ズ教会、カンバーラ
ンド・テラスにロイ
ヤル・ミュージズが完
成。トラファルガー
広場のもとが築か
れ、バッキンガム・
ハウス（現バッキン
ガム宮殿）の国家を
挙げての大増改築も
始まった。

あるが、真偽のほどは不明。ただ、理
由はどうあれ、ナッシュが与えられた
チャンスを見事にいかしたことは確か
だろう。
ジョージは摂政皇太子になった18
11年、ナッシュを含む3人の建築家
に、「メルルボン・パーク」周辺の再開
発計画案を提出するよう依頼した。こ
の「メルルボン・パーク」は、やがて
リージェンツ・パークに名前を変える
ことになるのだが、厚い粘土質に覆わ
れて常に見え隠れしており、当時は牧
草などが生える農地としてしか使われ
ていなかった。

ジョージ4世の別荘 ブライトンのロイヤル・パビリオン



■英国の名優、ナイジェル・ホーソーン主演の映画『英国万歳！(The Madness of King George)』(1994)で、狂気の王として描かれていたのがジョージ3世で、二枚目

英国にいることを
忘れそう!?

俳優ルパート・エヴェレットが演じていたダメ息子が後のジョージ4世だ。

■生真面目な父王ジョージ3世の、息の詰まるような宮廷から皇太子ジョージがブライトンに初めて逃がれてきたのは、1783年のこと。芝居好き、ギャンブル好きというおじのカンバーランド公爵に連れられてきたジョージは、当時、リゾート地として人気を博すようになっていたブライトンを大いに気に入った。首筋の腺病に海水が効くと医者にいわれたこともあり、ジョージはブライトンで堂々と湯治（水治）生活を楽しむことができたのだった。

■その3年後、カールトン・ハウスの改築で大きな借金を抱えたジョージは、ブライトンでしばらく隠遁生活を強いられる。ここで、最愛の女性であるフィッツハーパート夫人 (Mrs Maria Fitzherbert) とひそかに結婚する

大プロジェクト好きの 反逆児

繰り返しになるが、英
国王と議会は対立の関係
にあることが多かった。
ヘンリー8世（在位1
509〜47年）のように
絶対王権をほぼ確立し、
専制政治を行った国王も
いたものの、フランスの
ルイ14世などくらべると、
派手さでは見劣りする。
ヘンリー8世の時代には、
英国の
財政がそこまで豊かではなく、
建築技
術もまだまだ発展途上だったためとも
いえるが、英国ではヴェルサイユ宮殿
をしのぐ王宮はついに造られなかった。
豪華絢爛たる王宮で贅沢三昧の生活を
送ることを夢見た英国王は、おそらく
何人もいたことだろうが、議会による
反対の壁は常に厚かった。



▲「太陽王」ルイ14世（在位1643〜1715年）。

チャールズ1世の
処刑により、いった
ん共和制になったも
の、約10年後の
1660年には王政
復古が成った英国
で、後期スチュワー
ト朝の最後の統治者
となったアン女王
は、11歳で亡くなっ
たひとり息子以外
子宝に恵まれなかつ
た。同女王の逝去を
うけ、ドイツ生まれ
のハノーヴァー選帝
侯がジョージ1世
として即位。ハノー
ヴァー朝時代が幕を
あける。1714年
のことだ。

ジョージ1世は、
スチュワート朝の
初代国王ジェームズ
1世のひ孫にあた
る。そのまたひ孫がジョージ3世で、
ジョージ4世はその長男。ドイツ系ら
しく生真面目な性格だった父、ジョー
ジ3世とは対照的に、4世は手に負え
ないほどの放蕩息子だった。

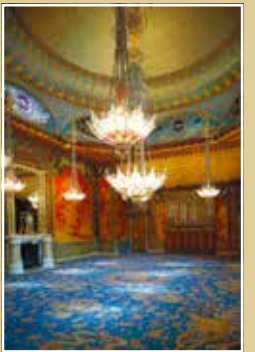


ウォータールー・プレイスからの眺め。
ジョージ4世の邸宅、カールトン・ハウス
がここに面して建てていた。ここからロウ
アー・リージェント・ストリートが、正
面の「カウンティ・ファイアー・オフィス
(County Fire Office)」に向かって伸びる。

ウェールズに引退する。
ところが幸か不幸か投資
に失敗。建築家として再
び働き始めざるを得なく
なってしまう。ナッシュ
が、もし遺産を賢く運用
し、そのままウェールズ
に引っ込んでいたら、今
のリージェント・スト
リートはなかったかもし
れない。

1792年、40歳で
建築業界に復帰。まもなく
ロンドンへと戻ってきた
ナッシュを、ジョージ
4世（当時はまだ摂政皇
太子にもなっていなかつ
た）がなぜそこまで重用
するようになったのか、
実はあまり知られていな
いとされている。一説に
よると、ナッシュとは大
きく年の離れた若妻が、
ジョージの愛人だったと
いい、なかなか説得力が
あるが、真偽のほどは不明。ただ、理
由はどうあれ、ナッシュが与えられた
チャンスを見事にいかしたことは確か
だろう。

■しかし、国民に嫌われることを恐れるような皇太子では
なく、お気に入りの建築家、ジョン・ナッシュを呼び、こ
こに別荘を建てさせることにした。その結果、できあがっ
たのが、外観はインド様式、中は東洋趣味で豪華絢爛とい
うロイヤル・パビリオンだ。好き嫌いは別として、イン
パクトの強い建物であることは確か。一見に値する！





CARLTON HOUSE
TERRACE SW1
CITY OF WESTMINSTER

5年の歳月をかけて1832年に完成した、カールトン・ハウス・テラス（Carlton House Terrace）。名首相のひとりといわれる、グラッドストーン（William E Gladstone）は1856年にはこの4番地に、1857年から75年にかけては11番地に住んだ。

を下回った。

もっとも独創的、かつ収益性が高いとしてジョン・ナッシュの案が採用され、1813年に「ニュー・ストリート」法が採択された。この「ニュー・ストリート」こそ、後のリージェント・ス

トリートである。通り沿いの建物からの家賃収入に大幅アップが見込めることから、王室にとつては一石二鳥ともいえる案が実現に向けて動きだした。

浪費王とほったり建築家の夢

うぬぼれ屋、派手好みなど、ジョン・ナッシュに就いての人々の評価は必ずしも好意的なものではなかったというが、ジョージ4世の完全なるバックアップのもと、ナッシュは自分の図面をもとに実際の形にする作業にとりかかった。カールトン・ハウス（現ウオータールー・プレイス）からロウアー・リージェント・ストリートをあがりピカデリー・サーカスへ。このすぐ北で湾曲するリージェント・ストリートからオックスフォード・サーカスを経て、やや広めのポートランド・プレイスを通り、パーク・クレセント、さらにはリージェンツ・パークに至るという大通りの建設作業が始まった。

しかしナッシュの案は、建設にともなうて次々と修正されていった。また、大通り沿いにナッシュがデザインしたタウンハウスの人気も芳しくなかった。ナッシュお得意の化粧しつくりを施して石造りのように見せた建物は安っぽく見え、増改築をむりやり繰り返した建物はバランスがくずれ美しいとはいえなかったのだ。加えて、細かい部屋に分かれた古臭い造りの建物はファッションナブルな商品を展開しようとする小売業者たちの間では不評で、その後



多くの建物が建て替えられることになる。

さらに、大通り沿いの建物をすべてナッシュがデザインした訳ではなく、当時の建築業界の大物たち複数がデザインに携わっており、それらをまとめるのもナッシュの仕事だった。この点についてはナッシュは合格したといえ、まとめ役としての任を果たし、南北に走るこの大通り沿いの建物にある種の統一感を持たせることに成功した。

ロンドンを華麗に変えた、税金のムダ遣い

リージェント・ストリートのハイライトといえるのは、ピカデリー・サーカスのすぐ北にある「クワドラント（Quadrant）」と呼ばれる湾曲部分。このデザインはナッシュの原案に忠実に従ったものとされている。ナッシュが国王に取り入ってこの一大プロジェクトを任されたというのが事実としても、実力がなければやり遂げることはできなかったという点を証明するに足る、華麗さをたたえている。

また、リージェント・ストリートがロンドンにおける目抜き通りとして特筆されるべきは、観光都市としてのロンドンに大きな付加価値を与えた事実についてだろう。

ショッピング通りとしてだけでなく、圧倒的なエレガントさをもって、それ自体が観光名所となっているリージェント・ストリートは、紛れもなく英国の財産といえる。

リージェント・ストリート建設には多額の税金が使われ、非難の的になった時期もあったが、後世になつてふりかえれば、観光収入として国民に還元されている。税金によって国宝が造られたとも考えられる。そして、ジョージ4世とジョン・ナッシュという「黄金コンビ」の存在なくしては、それは可能とはなりえなかった。

当時は悪評も多く聞かれたこの黄金コンビの作品群を、次号で紹介するが、その数の多さに驚かれる読者も少なくないだろう。ジョン・ナッシュとジョージ4世の姿を思い浮かべながら探索されることをお薦めしたい。（後編に続く）